

◆技術改良試験事業

シラヒゲウニ地蒔き式養殖試験Ⅵ

水産業改良普及センター 與那嶺盛次

1. 目的

シラヒゲウニ(以後ウニとする)は、本県ウニ漁業唯一の対象種であるが、近年乱獲等により資源が減少し市場価格が上昇している。ウニの種苗生産技術や養殖技術は県栽培漁業センターや県水産試験場で開発され普及に移されている。

そこで、県栽培漁業センターの協力を得て昨年度に引き続き具志川磯根資源活用研究会と種苗生産を行い、その種苗を用いて地蒔き式養殖試験を実施した。

2. 材料及び方法

供試した種苗は、平成21年8月5日に採卵し、9月15日に採苗して約6ヶ月間陸上飼育した平均殻径31.7mmの6,630個であった。これらの種苗は、棘が赤系統の雌雄親ウニをかけあわせて生産したため、棘の赤い種苗が多かった。

平成22年3月16日、4月1日、5月17日の3回に分けて放養した。試験場所は、地蒔き式養殖の漁業権が取られている具志川地先のホンダワラ藻場の沖に向かって右側の海域3ヶ所で、ペットボトルを浮かべて印しとした。

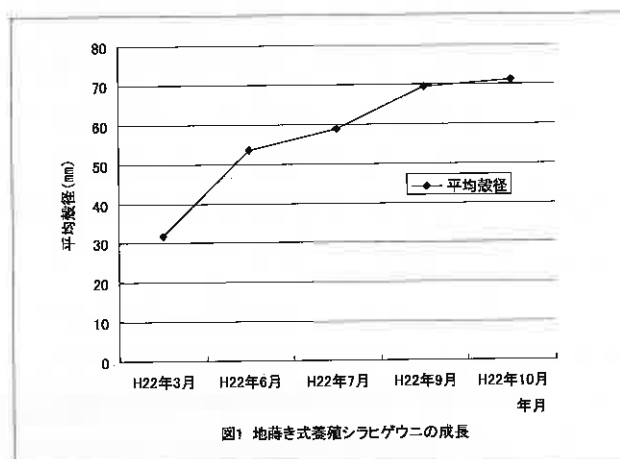
養殖期間は、平成22年3月16日から10月7日までの205日間であった。養殖期間中5回、毎回各50個体の殻径を測定し、身入りは各10個体を2回測定した。

3. 結果及び考察

養殖期間中の成長を図1に示した。平均殻径31.7mmのウニ種苗が、約6ヶ月後の平成22年9月7日には平均殻径69.3mmに成長して出荷サイズになった。また、ウニは、放養した地点からあまり移動せず周辺のホンダワラを食べ

尽くしたためウニを2回取り上げ、隣のホンダワラの繁茂する場所に移した。これは、成長促進や食害防止に効果があると思われる。

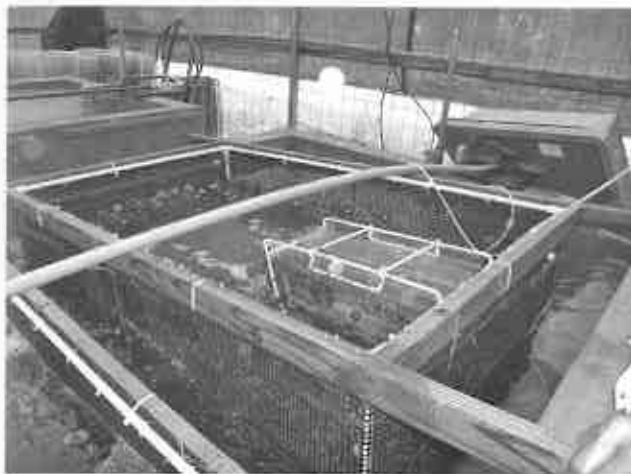
平成22年9月7日から収穫を実施し、10月7日までに1,197個(平均殻径 71.1 mm)を取り上げた。生残率は18.1%であった。身入りは15.3gであった。まだ、残っているため、生残率は、20%近くになると思われる。取り上げたウニは赤系統の種苗を放養したため、赤系統のウニが多かった。



具志川地先のホンダワラ藻場では、これまで、生残率が12.5~75.9%と比較的良好であった。これは、この海域で数種類のホンダワラが周年を通して繁茂し隠れ家となって食害が少ないこと、台風時にも岩の窪み等が多いことから流失が少ないことが主な要因と考えられる。また、ホンダワラはウニの良質な餌料であるため、身入りは良好であった。これらのことから、当海域は地蒔き式養殖漁場として適していると思われる。

4. 今後の課題

今後は出荷時期や出荷方法の検討を行い、価格の安定を図る必要がある。



①シラヒゲウニ種苗の中間育成



②シラヒゲウニ地蒔き式養殖試験海域



③放養したシラヒゲウニ種苗



④養殖試験中のシラヒゲウニ



⑤養殖試験場所のホンダワラ藻場



⑥取り上げた養殖ウニの一部